

北の国から

—まほろん収蔵アオトラ石製磨製石斧—

芳賀 英一

1 はじめに

アオトラ石とは俗称で、北海道の日高山脈西部の沙流川支流の額平川流域を中心とする地質学的には日高西縁緑色岩帯に分布する緑色岩で、適度な硬さと粘りがあるため古くから磨製石斧の石材として利用されている。石斧の表裏、側面にみられる「縞状痕」^(註1)が特徴であり、この地域から噴火湾周辺で主として製作された磨製石斧が本州北部に分布することが近年注目されており、南へどれだけ広がって流通しているか、それはいつの時代なのか、各地の石斧製作にどのような影響を与えたのか、その消長はどのようなものなのかが直近の課題である。現在のまほろん収蔵資料の中に、21 遺跡、69 点のアオトラ石製磨製石斧がある。それを図示し、またその代表的な例については、特徴的な縞状痕がわかるように巻頭カラーに示した。これらは、報告では緑泥片岩、細粒凝灰岩、蛇紋岩などとされている。当然ながらこれ以外に県内では、個人の収集品や市町村教育委員会が発掘調査した資料の中にも散見されるのを確認している。アオトラ石製の石斧については、最近まで県内の資料でその存在が示されたことはなく、昨年末に北海道沙流郡平取町で開催された「シシリムカ文化大学講座」の第3回講座「AOTORA＝アオトラ石の不思議—そのⅡ」と題する特別シンポジウムの中で、青森県の斎藤岳氏により福島市宮畑遺跡資料、南相馬市浦尻貝塚資料合わせて2点が紹介^(註2)されている。これが福島県内のアオトラ石製磨製石斧を紹介した最初であろう。今回はまほろん収蔵資料の概要に限定して報告する。

2 まほろん収蔵のアオトラ石製磨製石斧

アオトラ石製磨製石斧、あるいはその可能性が高いと判断した資料は、図1～図10に示した。さらに特徴的な縞状痕の在り方については、資料を摘出して図11・12に示した。図は、それぞれの報告書から複写し、縮尺を1/2に統一して図示した。それぞれの大きさ等については紙数の関係から表を省略したが、完形品等については本文中の資料番号のあとに（最大長×最大幅×厚さ）として記載し、また各報文の文責は福島県教育委員会に統一した。

(1) 会津地方の資料

1. 冑宮西遺跡のアオトラ石製磨製石斧（図1—1）

冑宮西遺跡^(註3)は、会津美里町にある縄文早期～前期、特にこの地域の中心的な前期後半の集落遺跡である。縄文前期末の沼沢パミス下の黒色土中から1のアオトラ石製磨製石斧が出土している。火熱を受けていて灰緑色に変色しており、一部にハジケが見られる。中央部から基部端にかけてより黒くなっており着柄痕を示すものとして注目される。両側縁が平坦であり、擦切技法により製作されたものと考えられ、刃部が斜刃となっている特徴を指摘できる。

資料の所属時期は、出土層位から前期末以前で間違いないが、確実にどの時期とは判断できない。他の磨製石斧は、1号住居跡、7・8号住居跡（ともに大木5式期）で白色の蛇紋岩製石斧が出土しており、この資料も前期後半に属する可能性がある。またこの遺跡では、前期後半に北海道から東北北部に散見される石剣^(註4)が出土していることも、アオトラ石製磨製石斧の流通と関係づけた場合に重要視される。

2. 法正尻遺跡のアオトラ石製磨製石斧（図1—2～8、図2—9、図11—2・8）

法正尻遺跡^(註5)は、磐梯町・猪苗代町にまたがる会津地方を代表する縄文時代の集落遺跡であり、住居跡10点、土坑12点、遺構外43点の磨製石斧が報告されているが、8点のアオトラ石製磨製石斧を確認した。2は、中期前半大木7b式期の34号住居跡床面から出土したもので、基部付近が欠損している。縞状痕が器体に対して斜めに観察され、右側面が平坦で、擦切技法と推定される。3は中期末に属する59号住居跡の複式炉跡の石組部から出土したもので基部側が欠損している。火熱を受けていて、火はねや変色が見られる。4は755号土坑から出土したもので、黒っぽく縞状痕が斜めに観察される。この土坑は、754・756号土坑と切り合っており、755号より新しい754号土坑、古い756号土坑ともに大木6式土器が出土していて、この土坑もこの時期と判断されている。5～8は遺構外出土の資料である。5・6は欠損品で、ともに火熱を受けて赤黒く変色している。6には刃部であるが、縞状痕が縦に2条観察される。7は側面に5から6条表面に楕円形に縞状痕跡を残す。刃部側が欠損し、その後に再成形されている。両側縁ならびに基部端が丁寧に研磨されており、全面研磨の定角式磨製石斧であったものと推定される。8・9も刃部付近が欠損したもので、火熱を受けて黒く変色している。基部端が切り落としたように直線的で、全面的に丁寧に研磨されている。8の片面の表面に同心円状に、9の側面に直線的に縞状痕を残している。また9の左側面では、研磨面に敲打痕が観察される。

法正尻遺跡出土資料は、遺構から出土した資料から、前期末の大木6式期（資料4）、中期前半大木7b式期（資料2）、中期末大木10式期（資料3）の3時期にアオトラ石製石斧が存在する。他の資料は、遺構外であり共伴関係は不明である。石斧基部端が丁寧に研磨された定角式の石斧（資料7～9）は中期の可能性はある。

（2）中通り地方の資料

1. 獅子内遺跡のアオトラ石製磨製石斧（図2—10～14、図3—15～20、図11—12～14、17・19）

獅子内遺跡・八方塚A遺跡・小屋館遺跡は、中通り北部の山形・宮城両県の県境に近い摺上川上流に位置する。獅子内遺跡は第1次から第4次まで4回調査^(註6)されており、このうち第1次（10～15）、第3次（16～19）、第4次（20）で合わせて11点のアオトラ石製磨製石斧が出土している。10～14は調査IV区出土のもので、10は基部側が欠損しているが小型の石斧である。片刃で側縁観察から擦切技法が用いられたものと判断され、表面に縞状痕を1条残す。11は刃部が欠損しており、撥形を呈する。基部端は敲き整形段階までの調整で終わっ

ている。今回紹介したのちに述べる前期前半の時期と想定した資料の多くが、基部端の研磨が行われておらず注意したい。火熱を受けて暗茶褐色に変色している。12 (7.5 × 6.7 × 2.8 cm) は報告では欠損品として扱われているが完形品である。基部端には研磨が行われていない。表面に大きく縞状痕を残す。また斜刃となっていることにも注意したい。13 は基部側の資料で、側縁が平行にならず、基部端も研磨されていない。片面に縞状痕が残り、縞状の間は砂質になっている部分があり、川原などの転石の表面部分を用いていることがわかる。14 は火熱を受けて火はねの部分に有する幅広の刃部を有するもので基部が欠損している。表裏に1条縞状痕を残す。15 は調査Ⅴ区から出土したもので、火熱で黒褐色に変色している。表面と側面に縞状痕が残っている。火熱により変色していてアオトラ石と断定することが難しいが、可能性が高いものとして提示したい。16 (13.2 × 6.9 × 3.3 cm)・17 (13.0 × 6.9 × 3.2 cm) は調査Ⅵ区出土資料で形状が似通った資料である。ともに片方の面の表面に縞状痕跡を残し、17 は火熱を受けている。16 の基部端は研磨が行われていない。18 (7.4 × 3.7 × 1.4 cm) はⅧ区の312号住居跡から出土した火熱を受けた完形の小型石斧である。片刃であるが、裏面に縞状痕跡を残す。この住居跡は、出土遺物と遺構の分布から縄文前期前葉に所属すると考えられている。19 はⅦ区の遺構外から出土した基部の資料で、基部端の研磨は行われていない。側面と片面に縞状痕跡が残る。20 は第4次調査Ⅵ区から出土した基部が欠損した資料で、表面と側面に縞状痕跡が残る。器面の一部は濃緑色を呈している。

獅子内遺跡の資料は、1点を除いて遺構外からの出土で所属時期を正確には特定できない。18の所属時期は前期前葉で、この時期にアオトラ石製の磨製石斧が存在する。また18の形は、同時期に見られる蛇紋岩製の石斧に近似する。他の資料では、欠損品も多いが、15を除いて、側面が撥型、基部端の研磨がなく、一部に斜刃の石斧があるなど共通した特色を有しており、前期前葉を射程として考えていきたい。

2. 八方塚A遺跡のアオトラ石製磨製石斧 (図3—21、図4—22・23、図11—22)

八方塚A遺跡^(註7)からは3点の当該資料が出土している。21 (9.5 × 4.4 × 1.6 cm)、22 (9.3 × 6.0 × 3.1 cm) は完形品、22 は火熱を受けている破損品である。21 は片刃であるが、裏面に縞状痕を残している。左側縁は一部屈曲しているが、擦り切りの際にできた段の痕跡と考えられる。22 は基部端の研磨はなく、裏面に縞状痕を大きく残す。3例ともに所属時期は明確でない。ただし擦切技法の存在や基部端の未研磨から獅子内遺跡と同様に前期前葉をその射程と考えていきたい。

3. 小屋館遺跡のアオトラ石製磨製石斧 (図4—24)

小屋館遺跡^(註8)では1点の当該資料が出土している。基部付近の資料で、基部端が欠損していてこの部分の成形が不明である。側縁は左側が平坦、右側が丸みを帯びており、左側が擦切技法の痕跡と判断される。所属時期は不明である。

4. 荒小路遺跡のアオトラ石製磨製石斧 (図4—25・26、図5—27・28、図12—26)

荒小路遺跡^(註9)は、中通り中部の郡山市田村町谷田川字荒小路にある縄文後期前葉から中葉にかけての拠点集落である。磨製石斧は16点出土しているが、このうち4点がアオトラ石

製磨製石斧である。25 (9.2 × 65.1 × 3.0 cm) は右側縁の形状から擦切技法により製作された石斧で、片面と側縁に縞状痕を有する。26 (13.0 × 6.4 × 3.2 cm) は両側縁が擦切技法により平坦に作られている。刃部が欠損しているが、表面の基部付近に縞状痕が残る。27 (21.9 × 6.6 × 4.2 cm) は大型の完形の磨製石斧である。灰緑色を呈し、基部端に敲打痕を残しているが、それ以外は全面研磨されている。刃部は直線的であるが、両側縁には研磨面の下に小さな敲打痕が見える。明確な縞状痕跡は見られない。28 (14.0 × 5.8 × 3.4 cm) も欠損しているが大型の石斧である。表面に縞状痕が残る。

荒小路遺跡の資料のうち、27 は 1 号溝跡からの出土であるが縄文時代より新しい溝である。これを含めて縄文後期前半から中葉の時期の資料と考えておきたい。

5. 西田H遺跡のアオトラ石製磨製石斧 (図5—29)

西田H遺跡^(註10)は、阿武隈高地中央の小野町に所在する、縄文早期・前期を中心とする集落遺跡である。29 (10.5 × 5.7 × 2.8 cm) はこの遺跡から発見された唯一のアオトラ石製磨製石斧である。右側縁が直線的に平坦となり、左側縁が丸みを帯びていることから右側が擦り切られている。完形品であるが基部端の研磨は行われていない。濃緑色を呈し縞状痕を裏面に残している。出土遺構は 11 号土坑であるが、他に出土遺物がなく所属時期は不明であるが、形態的特徴から前期前葉の可能性はある。

6. 桑名邸遺跡のアオトラ石製磨製石斧 (図5—30)

桑名邸遺跡^(註11)は中通り南部の天栄村にある中期中葉を中心とする古くから著名な集落遺跡である。1 次、2 次と調査されているが、2 次調査で定角式の磨製石斧の破片が 1 点出土している。非常に良質の石材で、両側縁が擦切技法により平坦に作り出されている。所属時期は不明であるが、中期の資料の可能性はある。

(3) 浜通り地方の資料

1. 段ノ原A遺跡のアオトラ石製磨製石斧 (図6—31～35)

段ノ原A遺跡^(註12)は、浜通り北部の相馬市に所在する縄文前期前葉を主体とする集落遺跡である。周辺に段ノ原B遺跡、山田B遺跡、猪倉B遺跡が分布している。遺構外から 10 点の磨製石斧が出土しているが、そのうち 5 点がアオトラ石製磨製石斧である。すべて小型の石斧で、縞状痕を残し、擦切技法により製作されている。34 は完形品であり、基部端の研磨は行われていない。33・35 は縞状痕が器体に対して縦に残るものである。34 は火熱を受けており火はね痕がある。

段ノ原A遺跡の資料は、確実に時期を想定できるものがないが、遺跡の主体が前期前葉であることと、特徴から前期前葉を考えていこうと思う。またこれらの石斧とともに白色で緑などの斑点が観察される蛇紋岩製の石斧が出土しており注目される。

2. 段ノ原B遺跡のアオトラ石製磨製石斧 (図6—36～38、図7—39～47、図12—37)

段ノ原B遺跡^(註13)は浜通り北部を代表する縄文前期前半期の集落遺跡であり 12 点の当該資料が出土している。36 は 51 号住居跡から出土した火熱を受けた磨製石斧の刃部で、擦切技法

により製作されている。変色が激しく、縞状痕は不明である。アオトラの可能性が高いものとして提示する。51号住居跡は前期前葉の大型住居跡で石斧の所属もこの時期であろう。37は87号住居跡から出土した石斧で刃部付近が欠損している。片方の面に間隔の狭い縞状痕を残す。基部端は研磨されていない。51号住居跡も前期前葉であるが、37号住居跡よりやや新しい。38は70号土坑出土のもので火熱を受けている。39(10.0×5.3×2.4cm)は前期前葉の155号土坑から出土した完形の磨製石斧である。撥型を呈し、両側に擦り切り痕を残す。基部端は研磨されてない。斜めに縞状痕を残す。40～47は遺構外出土の資料である。40(6.8×5.0×1.5cm)は薄い小型の石斧で縞状痕が見られないが、萌黄色を呈し、基部端は研磨が行われていない。41は欠損した石斧であるが、斜めに縞状痕を残し、右側縁が擦り切られている。基部端は敲打痕が残り、研磨は行われていない。42～47は欠損品で、それぞれ縞状痕や擦り切り痕を残している。

段ノ原B遺跡の資料は、形態的にも似通った小形の資料が多く、時期の判かる資料は前期前葉の資料であり、確実視はできないが、全体的に前期前葉のものとして捉えておきたい。また他に蛇紋岩製の石斧も存在することに注目したい。

3. 山田B遺跡のアオトラ石製磨製石斧(図8—48～55、図12—49・52・53)

山田B遺跡^(註14)では8点の当該資料を確認している。段ノ原A遺跡、段ノ原B遺跡の磨製石斧に形態的に近似した資料である。48(6.3×4.2×1.3cm)は前期前葉に属する15号住居跡から出土した片刃の磨製石斧で、一部が欠損している。表面に縞状痕が認められる。49～54は谷部の遺構外から出土したものである。49は基部が欠損した資料で、両側縁に擦り切り痕が観察される。側縁で縞状痕跡が観察される。50は刃部が欠損した資料である。51はやや砂っぽい材質であるが、擦切技法によって製作されておりアオトラ石製の可能性が高いものとして提示する。52(7.5×5.4×2.2cm)・53(8.0×5.1×2.4cm)は完形の資料で、ともに基部が斜めとなり、基部端の研磨は行われていない。縞状痕が表面や側面に観察される。54は、火熱を受けた破片資料である。

山田B遺跡の資料は、1点を除き詳細な時期は不明である。しかしその形態的特徴や遺跡が前期前葉を主体とすることから、この時期の磨製石斧と考えておく。

4. 猪倉B遺跡のアオトラ石製磨製石斧(図8—56)

猪倉B遺跡^(註15)からは、遺構外より1点の当該資料が出土している。56は基部が欠損しているが、擦切技法により作り出された石斧で、裏面に縞状痕が残る。所属時期は不明であるが、形態的特徴から前期前葉の可能性はある。

5. 荻平遺跡のアオトラ石製磨製石斧(図9—57、図12—57)

相馬市と福島市の中間の阿武隈高地にある荻平遺跡^(註16)は縄文前期を中心とする集落遺跡である。この遺跡からは興味深い資料が1点出土している。57(9.3×6.0×3.1cm)は完形品で左側面に擦り切りの際の「段」を残している小形の資料である。基部端は研磨されていない。出土層位はLⅡfで、この層は前期初頭の花積下層式段階の良好な包含層である。したがって現在のところ本県で最古のアオトラ石製品石斧と判断される。

6. 羽白C遺跡のアオトラ石製磨製石斧（図9—58）

羽白C遺跡^{（註17）}、羽白D遺跡^{（註18）}、上ノ台A遺跡^{（註19）}、日向南遺跡^{（註20）}、岩下向A遺跡^{（註21）}、浜通り北部の飯館村大倉地区に建設された真野ダム水没地域に分布する遺跡である。58は羽白C遺跡の1次調査で出土した当該資料である。ほぼ完形の石斧で、右側に縦方向に縞状痕が観察される。遺構外から出土したが所属時期については不明である。

7. 羽白D遺跡のアオトラ石製磨製石斧（図9—59～61、図12—60・61）

羽白D遺跡からは、1次（59）、2次（60・61）3点のアオトラ石製磨製石斧が出土している。3点とも擦切技法により製作されている。59は基部が欠損しており、裏面に縞状痕を残す。60も片面および側面に縞状痕を残し刃部は欠損している。基部端の研磨は行われていない。61（8.5×5.7×2.5cm）は完形の資料で、山田B遺跡52と同様に基部端は斜めになっている。側面に縞状痕が残る。

羽白D遺跡の資料は遺構外からの出土であり共伴関係は不明である。形態からは前期前葉の可能性が高いものと指摘しておく。またこの段階の縄文土器も多く出土している。

8. 上ノ台A遺跡のアオトラ石製磨製石斧（図9—62・63、図12—62）

上ノ台A遺跡の2次調査では2点の当該資料が出土している。62（11.8×5.9×2.2cm）は、両側縁が丸みを持ち、擦切技法によるものか不明である。表面と側面に縞状痕を残している。全体的に暗緑色を呈している。63は基部の資料であるが、基部端が研磨され定角式の石斧と考えられる。

上ノ台A遺跡は中期の集落遺跡である。この2点は、羽白D遺跡の資料とは形態や特徴が異なっており、中期の可能性が想定される。

9. 日向南遺跡のアオトラ石製磨製石斧（図9—64）

64（10.0×36.5×3.2cm）は日向南遺跡の遺構外から出土した資料である。完形品で基部端は敲打痕が残り研磨は行われていない。右側縁に擦り切りの際の段を残し、右側縁は敲打痕が残っている。裏面と側面に縞状痕を残している。所属時期は不明であるが、形態や特徴から前期前葉の可能性はある。

10. 岩下向A遺跡のアオトラ石製磨製石斧（図10—65）

岩下向A遺跡からは1点のアオトラ石の可能性のある資料が出土している。65は礫を研磨した資料で、擦り切り痕は観察されない。表面に縞状痕が残っており礫を使用したものとして注意したい。所属時期は不明である。

11. 八重米坂A遺跡のアオトラ石製磨製石斧（図10—66・67）

八重米坂A遺跡^{（註22）}は、南相馬市にある縄文時代早期～前期を中心とする集落遺跡である。遺構外から2点の当該資料が出土している。66は扁平の礫を利用しており、表面に縞状痕を有する。67は完形の片刃石斧で、基部端も薄く作り出されている。2点とも所属時期は不明であるが、66は、擦切技法があり、形態から前期前葉の可能性はある。

12. 中平遺跡のアオトラ石製磨製石斧（図10—68、図12—68）

中平遺跡^{（註23）}は、浜通り中央部の浪江町にある縄文時代中期～後期を中心とする集落遺跡

である。遺構外から 68 の大型 (25.2 × 6.7 × 4.2 cm) の石斧が出土している。表面に波文状に縞状痕を残し、縞状痕の中央部は、砂質で白っぽく、その周囲は濃緑色を呈する。全体的に丁寧に研磨され、両側面の研磨面下に敲打痕が観察される。この資料は荒小路遺跡の資料 27 に形態的に近似している。所属時期は不明であるが、後期前葉を考えておきたい。

13. 上平A遺跡のアオトラ石製磨製石斧 (図 10—69)

上平A遺跡^(註 24)は、浜通り中央部の大熊町に所在する縄文前期前葉を中心とする集落遺跡である。前期前葉の 9 号住居跡から出土しており、火熱を受けた完形の片刃の撥形石斧で前期前葉に帰属する。火熱のため変色しているが、縞状痕があり、アオトラ石製の可能性がある資料として提示する。

3 ま と め

資料の多くは遺構外からの出土であり時期を確実に指摘できるものは少ないが、前期前葉に集中し、前期後半、中期前半、中期末葉、後期前葉に散発的に出現していることを指摘できる。ただし前期前葉以降では、アオトラ石製磨製石斧を所有しない遺跡がほとんどで、荒小路遺跡、中平遺跡で後期前葉と想定した大型資料は異質であり、威信財のような性格であったかもしれない。最古の資料は荻平遺跡の花積下層段階の資料であり、それに続いて段ノ原B遺跡資料のように遺構出土の資料と形態的特徴から前期前葉と考えられ、また想定される資料が多い。前期前葉には、同遺跡をはじめとして軟玉製品などの玉類、蛇紋岩製磨製石斧が組み合わさっている。このことを考えた時、アオトラ石の原産地近くの日高山系にもこれらの原産地があり、石斧と組み合わさって流通しているのか、あるいは石斧は北海道から、玉類や蛇紋岩製磨製石斧は別に北陸地方からという図式が考えられる。土器の分析には多くを要するので別に分析したいが、渡島半島から東南北部、北陸地方の一部までの広範囲に前期前葉には、石川野・表館・十・新谷式といった似通った土器群が分布している。この段階にアオトラ石製磨製石斧の流通を特定するわけでないことを断っておくが、こうした背景も前期前葉に資料が集中することと関係するであろう。またこの段階以前に福島県内では、磨製石斧があまり明確でないことも注目したい。今回は第一段階として資料の提示でとどめた。今後ほかの石材を用いた資料の分析も含めて上記のような課題について分析を進めていきたい。石材や流通に関して、種々ご教授を受けた秦昭繁氏、斎藤岳氏に感謝したい。

< 註 >

(註 1) アオトラ石と判断したのは、緑色岩であり、表面や側面縞状の(側面は堆積の状況を示すように直線となる)痕跡を残す。この痕跡を「片理」と呼んで資料を集成していたが、斎藤岳氏からアオトラ石は変成岩とは異なるので片理という用語は用いないほうがいいのではないかとご教示を受けた。この痕跡を「縞状痕」と仮称して使用する。

(註 2) 平取町 2015「AOTORA = アオトラ石の不思議—そのⅡ」シンポジウム資料

(註 3) 福島県教育委員会 1990「冑宮西遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅷ』福島県文化財調査報告書第 277 集 (図示資料は、報告書第 118 図 53)

(註 4) 芳賀英一 1997「縄文時代前期後半の石剣について」『福島考古』第 38 号

(註 5) 福島県教育委員会 1991「法正尻遺跡」『東北横断自動車道遺跡発掘調査報告 11』福島県文化財調査

- 報告書第243集（図示資料は、報告書図79-15、図127-3、図603-10、図828-2・7、図829-1・1、図830-7）
- （註6）福島県教育委員会1991「獅子内遺跡（第1次調査）」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅱ』福島県文化財調査報告書第320集（図示資料は図250-1・4・5・6・9、図275-3）
福島県教育委員会1998「獅子内遺跡（第3次調査）」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅵ』福島県文化財調査報告書第346集（図示資料は、報告書図182-2・3、図211-3、図283-4）
福島県教育委員会1999「獅子内遺跡（第4次調査）」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅷ』福島県文化財調査報告書第351集（図示資料は報告書図45-10）
- （註7）福島県教育委員会1999「八方塚A遺跡」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅶ』福島県文化財調査報告書第350集（図示資料は、報告書図224-3・5・6）
- （註8）福島県教育委員会1999「小屋館遺跡（含小屋館跡）」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅷ』福島県文化財調査報告書第77集（図示資料は、報告書図28-6）
- （註9）福島県教育委員会1985「荒小路遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告19』福島県文化財調査報告書第148集（図示資料は、報告書図145-1411・1413、図146-1418・1420）
- （註10）福島県教育委員会2005「西田H遺跡」『こまちダム遺跡発掘調査報告3』福島県文化財調査報告書第424集（図示資料は、報告書図116-2）この資料については、当初の資料確認の際に蛇紋岩として見落としていたが、資料を閲覧された斎藤岳氏の指摘を受け、再確認したところアオトラ石製とであったので資料に加えた。
- （註11）福島県教育委員会1990「桑名邸遺跡（第2次）」『矢吹地区遺跡発掘調査報告6』福島県文化財調査報告書第226集（図示資料は、報告書図247-7）
- （註12）福島県教育委員会1995「段ノ原A遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅲ』福島県文化財調査報告書第312集（図45-3・4・7・9・10）
- （註13）福島県教育委員会1990「段ノ原B遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅲ』福島県文化財調査報告書第312集（図135-16、図198-19、図223-21、図274-7、図463-6・7・11、図464-1・3・9・12・13）
- （註14）福島県教育委員会1990「山田B遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅴ』福島県文化財調査報告書第333集（図44-12、図305-13、図307-2、図381-6・7、図324-5～7）
- （註15）福島県教育委員会2010「萩平遺跡（3次調査）」『阿武隈東道路遺跡発掘調査報告3』福島県文化財調査報告書第475集（図83-8）
- （註16）福島県教育委員会1988「羽白C遺跡（第1次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅻ』福島県文化財調査報告書第194集（図307-19）
- （註17）福島県教育委員会1987「羽白D遺跡（第1次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅹ』福島県文化財調査報告書第183集（図89-13）
- （註18）福島県教育委員会1988「羽白D遺跡（第2次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅺ』福島県文化財調査報告書第193集（図56-8・9）
- （註19）福島県教育委員会1990「上ノ台A遺跡（第2次）」『真野ダム遺跡発掘調査報告ⅩⅣ』福島県文化財調査報告書第230集（図382-9・21）
- （註20）福島県教育委員会1987「日向南遺跡（第3次）」『真野ダム遺跡発掘調査報告Ⅸ』福島県文化財調査報告書第182集（図160-7）
- （註21）福島県教育委員会1987「岩下向A遺跡」『真野ダム遺跡発掘調査報告Ⅹ』福島県文化財調査報告書第183集（図50-1）
- （註22）福島県教育委員会1994「八重米坂A遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書第297集（110図9,114図20）
- （註23）福島県教育委員会1989「中平遺跡」『国営請戸川農業水利事業遺跡調査報告』福島県文化財調査報告書第208集（図99-380）
- （註24）福島県教育委員会2003「上平A遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告37』福島県文化財調査報告書第414集（図20-13）



図1 まほろん収蔵アオトラ石製磨製石斧（1）



図2 まほろん収蔵アオトラ石製磨製石斧（2）



図3 まほろん収蔵アオトラ石製磨製石斧（3）



図4 まほろん収蔵アオトラ石製磨製石斧（4）



図5 まほろん収蔵アオトラ石製磨製石斧（5）

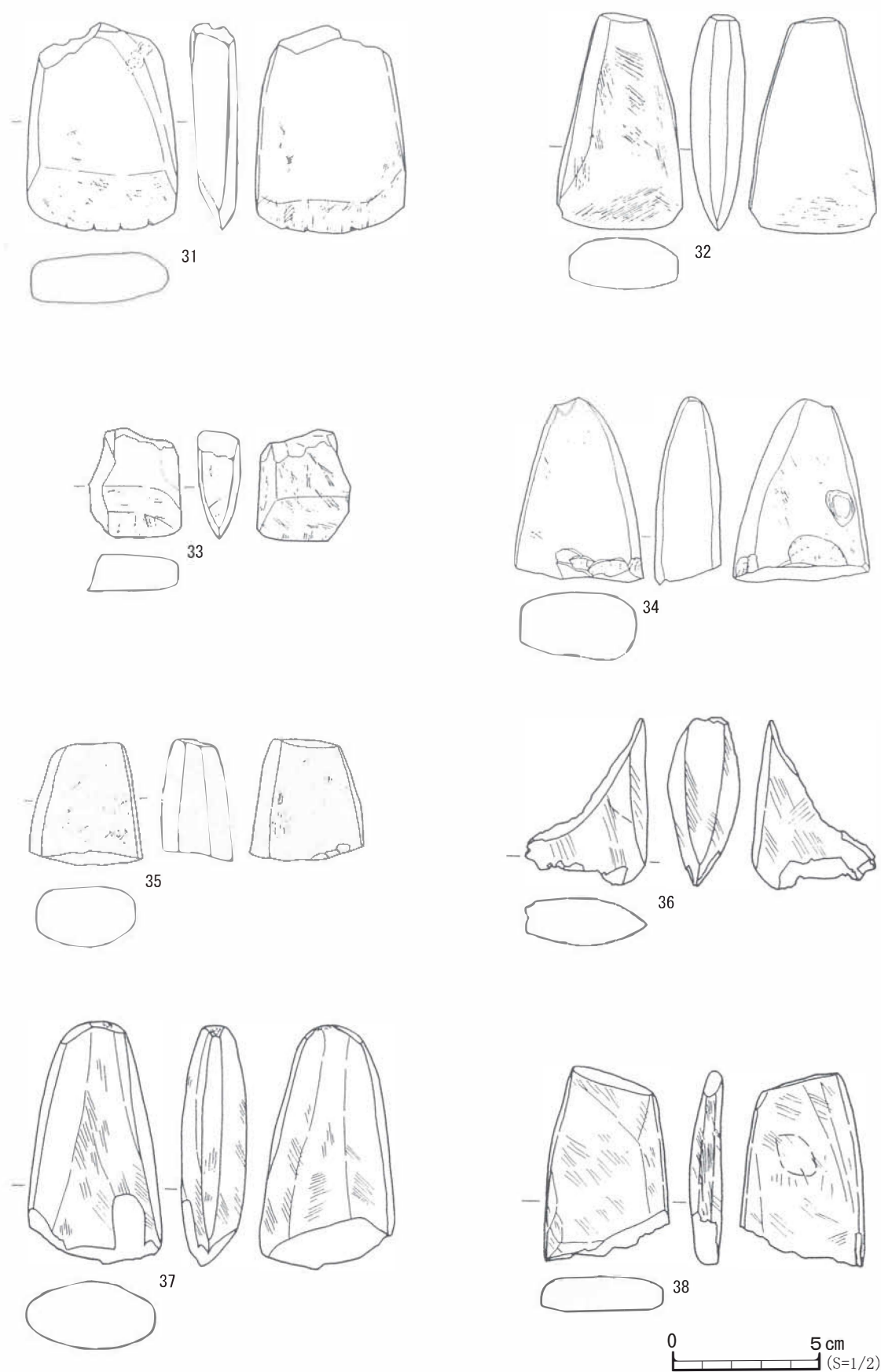


図6 まほろん収蔵アオトラ石製磨製石斧（6）



図7 まほろん収蔵アオトラ石製磨製石斧（7）

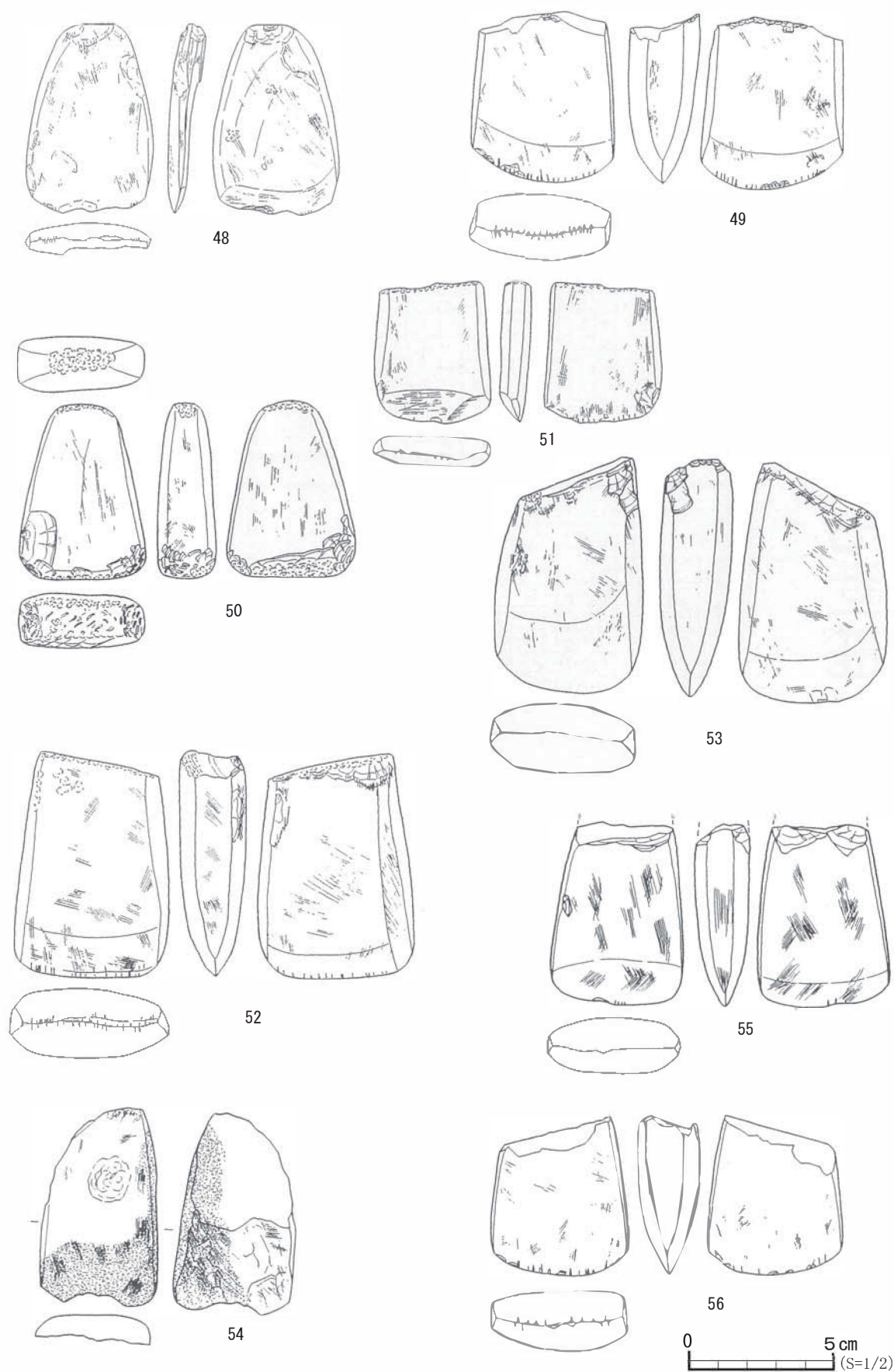


図8 まほろん収蔵アオトラ石製磨製石斧 (8)



図9 まほろん収蔵アオトラ石製磨製石斧（9）

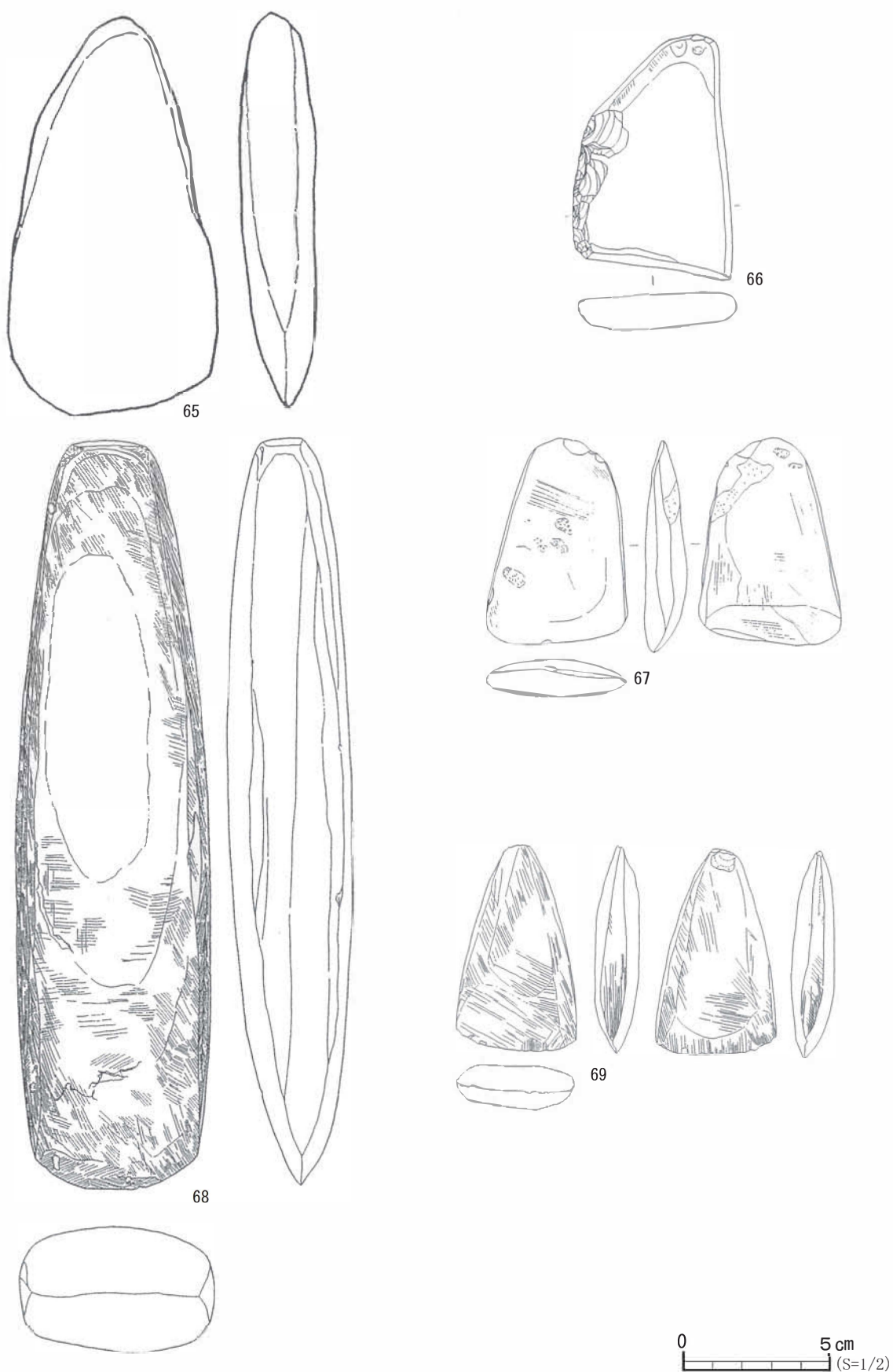


図 10 まほろん収蔵アオトラ石製磨製石斧 (10)

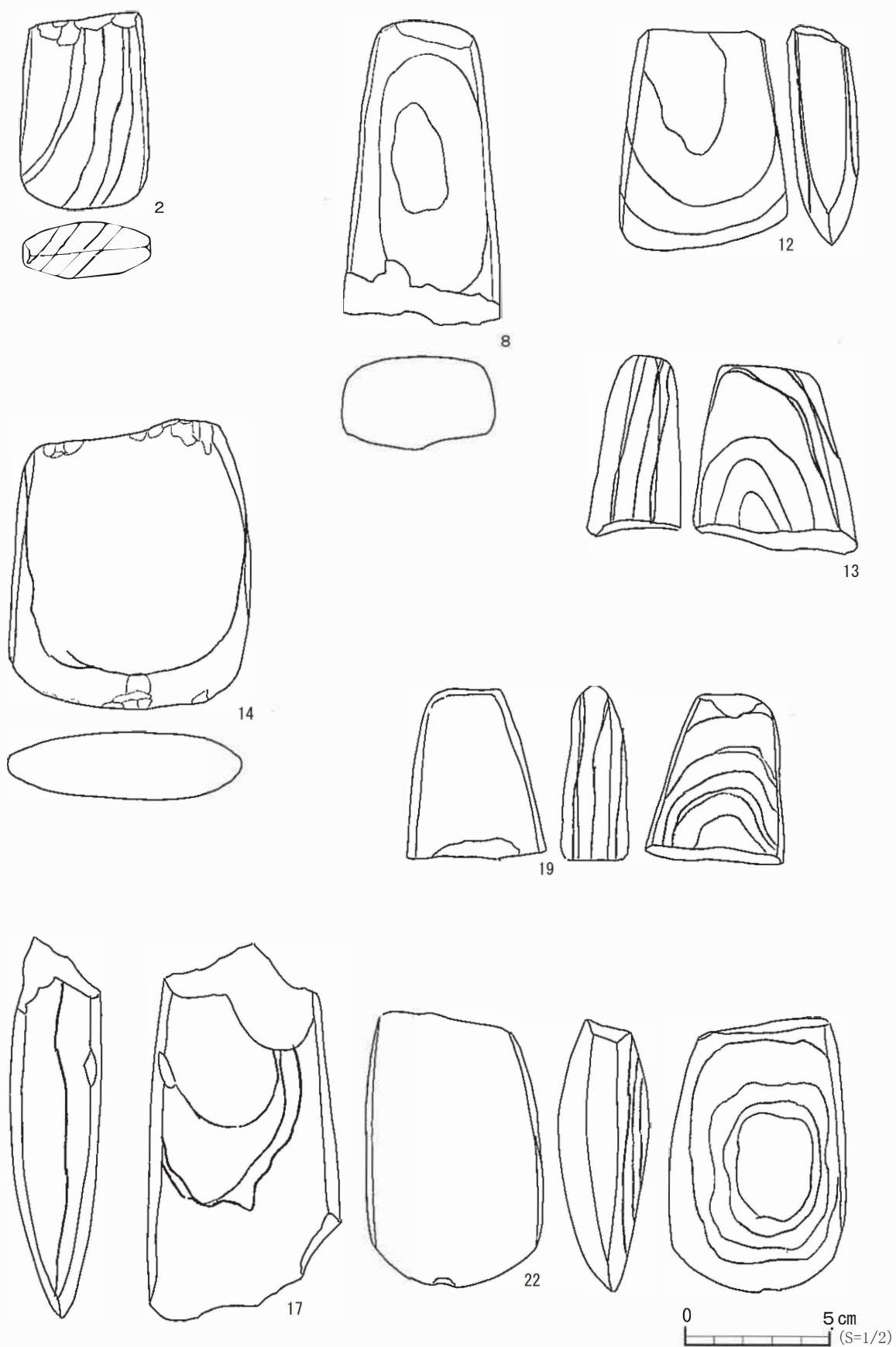


図 11 アオトラ石製磨製石斧の縞状痕（１）



図 12 アオトラ石製磨製石斧の縞状痕 (2)